

地域の情報

新潟県立長岡聾学校高田分校の開校について¹⁾

金子 浩子*・青木 ひとみ*・五十嵐 佐智江*・小池 豊*
小林 優子**・我妻 敏博**

1 はじめに

平成24年4月、県立長岡聾学校高田分校が上越特別支援学校内に新設された。高田分校は幼稚部のみを設置である。現在、上越市在住の幼児5名が在籍している。

原則、幼児と担任は、月・火曜日は本校へ通学する。水・木曜日は分校へ通学し、1月から2月の冬季間は高田分校のみへの通学としている。通学の負担軽減は大きなメリットである。

なお、金曜日は、居住地域の保育園で交流保育を実施している。健聴児とのコミュニケーションや大きな集団で様々な活動を体験することを目的としている。

2 少人数のよさを生かした 分校での教育活動

高田分校では、少人数のメリットを生かす教育活動を目指して、諸活動を進めている。在籍する幼児は、3歳児が3名、4・5歳児がそれぞれ1名ずつ在籍し、教頭を含め4名の教員で指導にあたっている。

10時からの学級活動では、3歳児のクラスと、4・5歳児複式の2クラスに分かれ、各学級で活動する。また、11時からは4・5歳児が、個別の学習を展開しており、個々のニーズに応じた指導や支援を行っている。午後の合同保育では、5人全員が集まって活動する。

年度当初は、異年齢集団で、3歳児が多いこともあり、子ども同士のかかわりが薄かった。しかし、日々の活動を重ねることで、次第に子ども同士でかかわり合って遊ぶ姿が見られるよ

うになり、縦のつながりの中で互いを意識したり思いやったりする面が見られている。

今年度、高田分校に在籍する幼児の聴力は、重度難聴から中等度難聴であり、全員が補聴器装用で、人工内耳の幼児は在籍していない。集団で行う活動においては、それぞれの子どもの聴力の実態を踏まえ、いろいろなコミュニケーション手段の活用やできる状況をつくるなどして、全員が活動に積極的に取り組めるように配慮し、みんなで活動する楽しさが味わえるようにしている。個に応じながら、しかし集団としての指導も大切にしながら、分校での教育活動を進めている。

3 地域のよさを生かす分校での校外保育

聴覚障害のある幼児にとって、学校行事や幼稚部行事は教科書のようなものである。行事の内容から派生する言葉自体が幼児の学習内容であり、言葉に体験を重ね合わせて言葉とその意味を獲得していく。

行事の多くは、本校で一緒に行っているが、分校独自の校外保育も設定している。春は高田公園で遊具を使って遊び、冬は妙高のスキー場に出掛けてそり遊びを楽しむなど、地域資源を生かす活動を仕組んでいる。

さらに、近隣のプールや隣県の動物園に出掛ける校外保育を実施し、経験を広げ、学習内容の充実を図っている。実際に見る・聞く・触れるなどの体験を通して、言語を習得する様々な機会を設けると共に、地域における活動をとおして地域のよさに触れて育ってほしいと願っている。



写真1 高田分校開講式典



写真2 分校での指導の様子

* 新潟県立長岡聾学校

** 上越教育大学大学院学校教育研究科

4 集団でのコミュニケーションを大切にする本校での教育活動

本校では、分校幼児を含めて20人で、集団での活動や行事などダイナミックな活動を体験させ、それらを通しての子ども同士のかかわりを活発にし、コミュニケーション能力や豊かな心の育成を目指している。大きな集団での活動や遊びは、コミュニケーション能力や社会性などの育成を図る重要な場や機会と考えている。

本校においては集団での活動が多く、分校の幼児も、同学年の教室で本校の幼児と共に活動を行う。本校では、集団が大きいことを生かし、いろいろな友達の話や意見を聴く、友達の発言に対して興味をもち、質問をするなどの学習が展開でき、多くのかかわりをもつことができる。

本校と一緒にやる行事では、大勢で活動するダイナミックさが、幼児にはよき経験となっている。

5 乳幼児教室から始まる支援

上越地域支援事業として、「上越子どものきこえ相談室」が、月に1回、開催されている。この「上越子どものきこえ相談室」は分校開設以前から上越教育大学との連携の下、実施されてきている。

高田分校においてもセンター的機能の発揮の場として、7月より乳幼児支援を開始した。上越市在住の乳幼児が本校乳幼児教室へ通級する回数のうち、一部の回数を高田分校で支援にあたっている。上越地域在住の乳幼児にとって、通級の負担が大きく軽減されている。

6 今後も分校のよさを生かして

今後も分校のよさを生かしながら、さらに教育活動の充実を図っていく。また、地域の聴覚障害教育のセンターとして、地域支援も充実をさせていきたい。さらに、様々な教育活動を充実させるために、研修に励み、聴覚障害のある子どもへのさらなる指導力向上を目指していきたいと考える。

注

- 1) 本稿は、特別支援教育実践研究会第1回実践研究発表会にて発表した内容を文章にまとめたものである。



写真3 本校での集団活動の様子